

特集

# 地域の“共育力”を 育てよう!

## 子育て支援のあり方を考える



みんなで楽しく昼食タイム!



中学生の「お姉さん」が  
V体験に来ました!

### 異年齢の交流が広がる 小学校の余裕教室での子育て支援

子育て支援ボランティアグループ  
「きらきらぼし」(神奈川県茅ヶ崎市)

#### 誰もが安心して参加できる「子育てのたまり場」

茅ヶ崎市湘北地区に「子育てのたまり場」を創りたい。地域で人形劇サークル活動を行う有志と主任児童委員、民生委員の4名の想いによって、平成10年に結成し、10月に子育て支援グループ「きらきらぼし」が誕生した。手作りチラシをスーパーで配布したり、子育て中の母親に直接声をかけるなど、4組の親子が参加することとなり、同地区の団地内にある集会所で月1回の活動を開始。

そんな中、自治会、PTA、社協、行政等が参加する市民集会の中で、他のV団体とともに「活動拠点」を求めた。約1年にわたる協議を重ねた結果、平成11年10月より小学校の余裕教室を改装した「多目的室」がオープン。こうして、「学校」という地域の誰もが安心して参加することができる場での子育て支援が、本格的にスタートした。

#### ポイントは4つの場

活動日時は、毎週月曜日と第3土曜日の10時～14時。親や保護者、子どもたちが自由に過ごせる「オープンスペースの場」、出会いや情報交換をする「交流の場」、異年齢の子どもたちが遊びを通じて「触れ合う場」、親や保護者が地域の方と「知り合う場」の4つの場をポイントに活動を行っている。現在の親子参加人数は平均15組。最近、母親と一緒に父親の姿も見られたり、祖父母が孫を連れて来ることも。

また、昼食時には、それぞれが持ち寄った弁当を親子もボランティアも一緒に食べるのが特色で、子育ての悩みなどを話し合う大切な一時となっている。

#### 小学生から大学生まで。異年齢のボランティア交流

余裕教室を活用するにあたり、ボランティアが思い描いていたのが「小学生との交流」。実際に、休み時間を利用して小学生が訪れることも多く、乳幼児にとっても「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」は魅力的な存在で一緒に遊んだり、小学生にとっても授業とは違う雰囲気ですらリラックスできる貴重な時間ともなっている。

都市化した社会での子育てが密室化し、子育て不安の一般化や児童虐待など深刻な課題があるなか、子どもを地域社会全体で守り育てるといった視点が求められています。

地域の大人たちや各種組織・団体が子どもに関わることで、子どもの健やかな育ちを支援し、地域の安全を守るとともに、地域社会としての“共育力”(大人と子どもが共に育ちあう力)も育まれていくものと思います。

そこで今回の特集は、子育て支援を進める活動事例を通して、地域社会における子育て支援のあり方を考えていきます。

また、4年前には公民館事業「保育ボランティア体験」を共催で2年間実施。これは、主に中・高生が保育Vを体験するというもので、これをきっかけに現在では夏休み期間を中心に、中・高生以外にも専門学校生・大学生も参加するようになった。当初は「親子の遊び場に中高生がなぜ?」と不安げだった母親たちだが、今では我が子と遊んでもらう一方で、進路相談など若者の悩みを聞く姿も見られるようになった。

その他、毎年行われるきらきらぼしの「誕生会」に人形劇サークルや読み聞かせのVグループなどが参加し、地域のVグループとのつながりも広がっている。



#### お母さん同士がつながり、 地域の人々がつながり始めました

子育て支援ボランティアグループ「きらきらぼし」  
代表・小澤美江さん

私が大阪市に転勤していた時に起きた阪神・淡路大震災以来、「自分にはできないことはないか」との想いを持っていました。茅ヶ崎市に再び帰ってきて「人形劇サークル」に参加しながら、市内の「子育て支援センター」でレスパイト保育者として関わらる中で、「地域版の支援センター」を作りたいとの想いが募り、何もわからぬままグループ結成に携わりました。

当地区では、2歳以上の親子が自主的に活動しているコミュニティ保育サークルがあるため、「きらきらぼし」には乳幼児の親子が多く参加されます。

現在10名の保育ボランティアが当番制で活動を行っています。私たちは、お子さん同士を遊ばせる雰囲気を作って、親御さん同士がゆっくり話す時間ができ、仲間づくりにつながるよう心がけています。

活動拠点である鶴が台小学校の余裕教室は団地内にありますが、今まではお隣り同士でさえ知らない世帯があったのに、きらきらぼしでの交流を通して団地の中でも顔見知りが増え、子どもを預け合ったりしているようです。町の中では、保育V体験をした中学生からお子さんの名前を呼ばれたり、地域での顔見知りが増えたように思います。

最後に同じ高校生からの感想を紹介いたします。「母親というものが、子育てについてこんなに悩みを抱えているとは知らなかった。このV体験を通して、自分の母とのコミュニケーションが深まったように思います」。

### 障害のある子どもない子ども、 おもちゃを通じて楽しく交流

小松おもちゃ図書館サン・アビ/ボランティアグループ  
「つくしんぼ」(石川県小松市)

#### おもちゃの図書館はボランティアによる運営で

石川県出身である「財団法人日本おもちゃ図書館財団」創設者・故山科直治氏が「ぜひ小松市にもおもちゃの図書館を創りたい」との想いから、県社協を中心におもちゃの図書館開設に向けた動きが広まり、平成2年8月、勤労身体障害者施設「小松サン・アビリティーズ」の一室を拠点に開設することとなった。

運営は、当時サン・アビを拠点に音訳V活動を行っていたグループに依頼。これまで障害児と接したことがなかったメンバーは戸惑いながらも、元知的障害児施設職員のサポートを得て、設立に向けての準備を行った。当初5名だったメンバーは個々に声かけしたり、広報誌で募集をかけた結果、30名のボランティアが集まり、おもちゃの図書館の運営を行う「つくしんぼ」が結成された。

#### 心のバリアフリーをめざした図書館利用

「小松おもちゃ図書館サン・アビ」の開館日時は、水(午前10時～15時)土(午後1時～15時)日(第2・第4午前10時～15時)。おもちゃの貸出は1人1点で、2週間で期限にカードに記入して貸出することになっている。

利用に際しては、障害児とその親子に限らず健常の乳幼児でも「すぎなの子」として登録すれば、自由に遊べる場であるが、開館以来、おもちゃは障害児だけに貸出をしてきた。しかしここ数年、登録者数は増えているにも関わらず、利用者が減少。その原因として、「おもちゃの図書館＝障害児と見られるから」という障害児の保護者の想いがあり、障害児自身からの「どうして自分たちだけ借りられるのか」という疑問があった。

急遽メンバーで話し合いをもった結果、スタート時90点しかなかったおもちゃが400点以上に増えていたこと、そして何より「心のバリアフリー」をめざして規則を変更。今年5月より、障害のあるないに関わらず誰もがおもちゃで遊び、借りられるおもちゃの図書館へと生まれ変わった。

沢山の子どもたちと  
親御さん。今日も大  
賑わいです!



#### 「おもちゃ」がつながく、多彩な取り組み

開館日には毎回、5組から15組程の親子が訪れるが、特に平日の水曜日には乳幼児を連れてきた母子で一杯。おもちゃに夢になる子どもに気を配りながらも、母親同士で情報を交換したり、おもちゃ整理などボランティアの手伝いをしたりと、子育てサロンの場に。

一方、おもちゃがつながく地域との関わりも多彩である。その一つが「移動おもちゃ図書館」で、市内の重度心身障害児施設を訪問し、毎月1回実施しているほか、障害児が通う小学校や障害児をもつ母親たちの研修会時に保育Vも兼ねて訪問するなど、依頼があれば積極的に取り組んでいる。

また2年前に、地域の工業高校から「生徒の地域貢献活動を」との相談を受けたことをきっかけに、年1回開催する図書館バザーでおもちゃ修理を行ってもらっているほか、今では図書館専用の「おもちゃ病院」として高校生たちも協力。

現在、「育成会」と連携し勉強会やイベント等を行っているが、今後はその他の障害者グループとの協働も視野に入れ、地域の中でさらに幅広い支援活動をめざしている。



#### 20代から90代まで 助け合える仲間と一緒に

ボランティアグループ「つくしんぼ」  
代表・宇井真理子さん

通常の子育て支援は「健常児」が中心ですが、おもちゃの図書館は「障害児」が中心となります。そのため、子どもたちへのサポート以上に「お母さんの心のケア」が大切。私たちボランティアは、「心を打ち明けて話ができる」「家庭の中では難しい、子どもを遊ばせてくつろげる」場づくりを心がけています。

おもちゃは鍵のかかったガラス棚に収納しており、子どもたちが自ら「貸して」と言うプロセスを大切にしています。これは、子どもと保護者が一緒にどのおもちゃで遊ぶか相談をするという「言葉の交流」と、遊び終わったら自分で棚に戻すという「片づけ」の習慣を身につけてほしいから。

ボランティアは交代制で、約3名が図書館での活動を行います。20代の若者はクリスマス会で音楽演奏を、最高齢の97歳のおばあちゃんも「子どもたちの顔を見ていつもニコニコ」、個性や特技を活かして活動しています。また以前、重度の障害児をもつお母さんがショックでひきこもっていた時、家族が図書館の存在を知り、お母さんを連れてこられました。来てみたら、「障害のあるのは自分の子どもだけじゃない事がわかり、皆がいろいろ応援してくれるのも知って子どものために自分が頑張らねば」という気持ちが芽生えた。今では、「あの頃の私のようなお母さんがいたら力を合わせていこうと声をかけてあげたい」と、積極的におもちゃの図書館の活動に関わってくれています。

現在、ボランティアは52名。誰かが困っていると助け合える仲間、それが「つくしんぼ」のメンバーです。

## 「共育力」を育むために

地域社会の「共育力」を育むために、どのような子育て支援が求められているのでしょうか。ここでは、特定非営利活動法人「日本子どもNPOセンター」専務理事であり、本誌の編集委員でもある福田房枝さんに「地域社会」「ボランティア・市民活動」「ボランティアコーディネーター」3つの視点でお話を伺い、ポイントでまとめました。

### 地域社会に求められる子育て支援

#### 1. 子育て支援の多様性を認識する

核家族化、地域社会での人間関係の希薄化、女性の社会進出、長引く不況など、現代の社会状況と価値観の多様化に伴い、子育て中の女性が抱える悩みも多様化している。

「子育ては昔の女性なら誰でもやってきた」という古い価値観や、従来のような画一的な支援では、100者100様と言われる子育て中の親たちのニーズを支えきれないことを、まずは地域社会が認識しておくことが大切である。

#### 2. ニーズの多様化に対応する

「自分の時間がない。一人になりたい」という悩みを抱える母親に対しては、理由を問わず子どもを預かる「一時保育」の場を。「話し相手・友達がほしい」という0歳児を持つ母親に対しては、「室内版の公園」を。「子どもを育てる自信がない」等々、その他諸々の悩みをカウンセリングできる「育児相談所」を設けるなど、地域社会は多様化するニーズに対して個別に対応できる支援サービスを考え、提供していく必要がある。

### ボランティア・市民活動が担う支援

#### 1. 子育て支援についての「専門性」を持つ

個別に対応する子育て支援を提供するのは、公的サービスだけでは難しい。そこで、力を発揮するのが「ボランティア・市民活動」の領域である。

今後、多様化するニーズに対応していくためには、「専門性」のある応援者としての支援が求められる。例えば、保育士に求められるような技術や医学的知識、さらには、親の背景にある個別的ニーズを把握できるスキルなどが望まれる。

#### 2. 最終的な目的は、「子どもの成長」を支援すること

子育て支援において、子育て中の親を支援することはもちろん重要なことだが、最終的な目的は「子どもたち」の健やかな成長・発達を、社会が責任を持って支援することである。

そのためにも支援者は、時として「親としてどうあるべきか」のアドバイスや、「親が親として育つ」ための支援も求められる。

#### 3. 「女性の自立」と「夫の育児参加」を促す

社会でキャリアを積んだり、あるいは、家庭の経済的不安などから、「出産後、働きたい」という女性のニーズも多い。今後は、保育園に預けながら技術を磨いたり、資格を取得するなどの「就労支援」も求められる。

一方、「夫と子育ての喜び・苦しみを共有できない」「夫は帰宅時には疲れ果て、会話の時間が持てない」など、子育て中の女性が抱える悩みの中で最も多いのが、実は「夫」との問題。

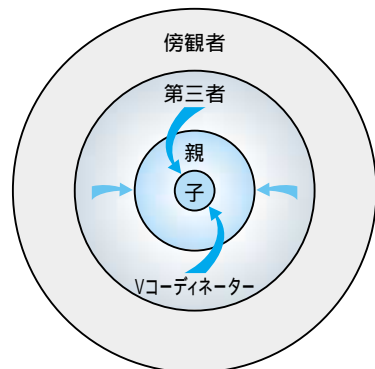
「子育て支援＝母親支援」と思われがちだが、男性の育児参加を促すことも必要であろう。例えば、「土日を利用した男性の育児企画」や「企業での育児休暇の取得」など、魅力的なプログラムの提案や社会制度の整備も必要だが、「子どもと関わる」ことが、自身の豊かさにつながる」ことを男性に意識的に啓発していくことこそが大切。

### ボランティアコーディネーターとして求められるもの

#### 1. 「第三者」としての自覚をもつ

地域の中に4重構造があるとの視点をもつことが大切。「児童虐待」を例にとれば、暴力を受ける子どもがいて、暴力をふるう親がいて、気づいていながら注意しない傍観者がいる。そして、注意する立場が「第三者」。

Vコーディネーターは常に地域の中の「第三者」の一人として、現場に関わっていくという自覚をもつことが大切。



#### 2. 地域の資源をつなげ、女性の自己実現の場を提供する

子育て中の女性の中には、「何かをしたい」「社会の役に立ちたい」と潜在的な意識を持っている人も多い。Vコーディネーターは今後、VグループやNPOと専門家、行政等をつないで、そうした女性たちの自己実現やきっかけづくりの場を提供・支援していくことが必要である。

#### 3. 魅力あるプログラムを企画・開発する

プログラムづくりの際に留意したいのが、「今までこうしていたから」ではなく、親の「こうしてほしい」とか、ボランティアの「こうしたい」という想いを引き出し、それをグループの立ち上げやプログラムづくりにつなげるという視点。それがVコーディネーター自身のやりがいにもつながり、自身が楽しく関われる秘訣にもつながる。